

# 寒冷地の大豆作における茎葉処理剤 「フルチアセットメチル乳剤」の初期薬害

## 《大豆作における雑草防除の現状》

大豆作の雑草防除では、土壌処理剤の他に、中耕培土や茎葉処理剤による大豆生育期の防除を行う必要があります。しかし、大豆生育期に全面散布できる広葉雑草を対象とした茎葉処理剤は大豆バサグラン液剤しかなく、この剤に対して効果が低いイヌホオズキや帰化アサガオ類雑草などの雑草が問題となっており、新規の茎葉処理剤が切望されています。その状況下で、フルチアセットメチル乳剤（商品名：アタックショット乳剤）が農薬登録されましたが、本剤は大豆初期生育への薬害が懸念されています。そこで、現場での実用化に当たり、初期薬害の特徴を明らかにし、適切な使用方法に関する情報提供を行っています。

## 《フルチアセットメチル乳剤の初期薬害の特徴》

本剤を処理すると、写真1のようにほとんどの大豆品種で、褐変、縮葉などの薬害症状を生じ、薬害が強く出た場合は落葉を生じることもあります。

この初期薬害に関して、3ヵ所での連絡試験を実施したところ、茨城県つくば市、広島県福山市の温暖地の試験では薬害程度が小さく、秋田県大仙市の寒冷地の試験では薬害が強く生じました。その後の試験結果の情報を含めて考えると、本剤処理直後の低温が初期薬害の助長要因として浮かび上がっています。



写真1 / 初期薬害症状（品種：ナンブシロメ）

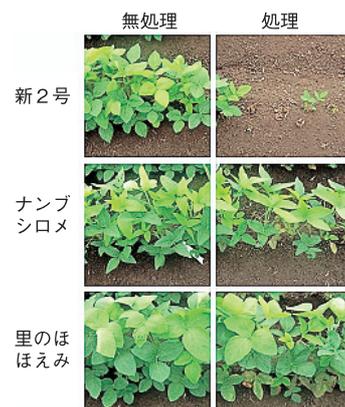


写真2 / フルチアセットメチル乳剤処理2週間後の大豆生育状況

水田作研究領域

川名義明

KAWANA, Yoshiaki



「新2号」。

2) 薬害程度中（同25～30%）：一部の小葉が落葉し、生育抑制が生じる長葉品種の「ナンブシロメ」、「すずほのか」。

3) 薬害程度小（同20%以下）：落葉に至ることが少なく、生育抑制が小さい「リュウホウ」、「里のほほえみ」など11品種。

寒冷地では、初期薬害による初期生育抑制が減収につながることもあり、処理2週間後の大豆生育抑制率が20%程度の場合、約8%減収する事例があります。

## 《フルチアセットメチル乳剤の使用に際して》

本剤は除草効果の高いヒユ科雑草、ナス科雑草などの草種が優占する圃場で使用します。使用に際しては、寒冷地では初期薬害の程度が大きく、その抑制が収量の減収に結びつくことがあることや品種間差異があることなどを踏まえ、登録内低薬量での処理を検討したり、十分な生育量が確保されるように適切な栽培管理を行う必要があります。さらに、他の茎葉処理剤との混用や展着剤の使用は薬害を助長する場合があります。安全性が確認されていない農薬との混用は行わないで下さい。

以上の情報の詳細は下記の技術情報「大豆用新規茎葉処理除草剤フルチアセットメチル乳剤の雑草種別効果と初期薬害」をご参照下さい。

[https://www.naro.affrc.go.jp/publicity\\_report/publication/pamphlet/tech-pamph/081344.html](https://www.naro.affrc.go.jp/publicity_report/publication/pamphlet/tech-pamph/081344.html)

また、フルチアセットメチル乳剤の初期薬害と難防除雑草対策への活用などについては、下記の農研機構中央農業研究センター「雑草管理」研究プロジェクトのホームページなどを通して、情報共有を図っていく予定です。こちらもご参照下さい。

[http://www.naro.affrc.go.jp/laboratory/carc/contents/zasso\\_pro/](http://www.naro.affrc.go.jp/laboratory/carc/contents/zasso_pro/)

ちなみに、寒冷地での処理後2日間の平均気温は20～22℃でした。

また、寒冷地の試験では、本剤による薬害程度に品種間差異が見られ、下記のように分類されます。

1) 薬害程度大（処理2週間後の生育抑制率80%以上）：著しく生育が抑制され、枯死株も発生する「操大豆」、